

「憲法解釈」でもめている昨今であるが、「解釈」ほどやっかいなものはないと思われる。

なぜなら解釈する対象は、現在とか未来とかはあり得ず、過去に限られるからである。

そうして解釈は、その解釈する対象に乗り移って考えなければならない部分が必ず出てくるからである。

現在の辞書には、「解釈」は「受け手の側から理解すること」とあるが、これは辞書の間違いである。

受け手の側から理解するのは、「享受」であって「解釈」ではない。

もしそれを「解釈」と呼ぶなら、「解釈」と云う言葉は死語にしたほうがいいくらいだ。

そんな論議をしていたら棺桶屋がやってくるから、ここでは「解釈」の解釈は、個人的解釈とする。

歴史上の人物を解釈するなら、その人物に乗り移って、自分がその人物になった振りをする。

歴史上の著作を解釈するなら、その著作に乗り移って、自分がその著作を書き写してみる。

歴史上の事件を解釈するなら、その事件に乗り移って、自分がその当事者の気持ちになってみる。

だから解釈する場合は、いま自分が生きている時代からモノを見るのではなく、その当時のことを客観的によく認識しなければならない。

例題はなんでもいいのだが、今回は「忠臣蔵」にする。

「忠臣蔵」の解釈は、十人十色で面白いと云えばこんなに面白い題材もないのだが、またこれほど一般に誤解されている歴史上の題材はないほどだ。

赤穂事件に多かれ少なかれ関与した人物の書き残した資料は相当量あるのだが、なにせ事件が事件であるから、己や己の立場や己の主に都合のよい風を書いたりしているものが多い。

事件が事件と云うのは、前例のない画期的な事件であるとともに、一

一般人のこの事件に関する興味や嗜好が半端ではない、つまり絶大な人気があることである。

前例がないと云うことは、これが前例になると云うことであって、前例を作ることの困難さが、真実を妨げる。

また人気があると云うことは、『仮名手本忠臣蔵』を引っ張り出すまでもなく）最良の引き倒しと云う結果になりやすく、また書いた己をも（四十七士同様に）讚美してしまう結果にもなってしまう。

当時でさえこうなのだから、現代の眼で真実を読みとることの困難さは並大抵ではない。

逆にそれでも現代人なら、損得勘定抜きに云々できるから、あんがい便利と云えないこともない。

赤穂側ではなく吉良側から、もしくは討ち入りに参加しなかった側の人間を書いたものを読むと、むしろその線の書き方をしているから、吉良上野介や大野黒兵衛の立場もそれなりに理解できる。

それでもこれらは奇を衒った発想であり、悪者扱いに対する弁護士の書き方であり、ゆえに逆に浪士側を無理矢理貶めている感もあり、客観的な視点とはとても思われぬ。

本質を度外視した、参考意見と云うレベルのものばかりである。

現代の文化人の発言の多くは、当然のことながら無責任である。

どうしても現代的感覚で物申すから、史実と照らしても素っ頓狂な発言が多い。

例えば内匠頭は、「発達障害」だったからあんな事をしたのだとか、よってたかって老人をやっつけるなんて「敬老精神」にはずれる「いじめ」だとか、切腹したがる四十七士は「マゾ」の軍団だとか、なかなか面白い発想だけれども、何よりも武士という存在の本質がまるで解っていない。

忠臣蔵（もしくは討ち入り）の中心人物は大石内蔵助であり、内蔵助以外にはいないと思込んでいる人が大半である。

けれどももうひとりの中心人物がいて、その武士は高田馬場の決闘で有名なごぞんじ堀部安兵衛である。

有名すぎて軽視しがちだが、浅野内匠頭切腹以後から討ち入りまで、その間の赤穂浪士達（少なくとも江戸在住の浪士達）の、精神的支柱に

在ったのは、大石内蔵助以上に、堀部安兵衛であったのだが、そうなる
と柱が二人になってしまって、主題も拡散しやすい。

堀部安兵衛には「高田馬場」があるから、「忠臣蔵」の柱は大石内蔵助
一本に絞ろうと云う魂胆が垣間見られる。

もっと解りやすい例を挙げよう。

生島遼一は、【ピカソはもう前衛芸術家ではなく、むしろ二十世紀の古
典だ】と書いている。

まさにその通りだ。

けれどもそれは、解釈ではなく、肩書きだ。

ピカソの解釈は、「古典」として解釈したのでは、結果論の現代的解釈
に他ならず、決してピカソの真実に行き当たらない。

やはり「前衛芸術家」としてのピカソに乗り移って、解釈しなければ
ならないと云うことだ。